

非行的態度の抑制要因に関する研究^{1) 2)}

松 井 洋*・中 村 真**
堀 内 勝 夫***・石 井 隆 之****

Restrained Factors of Attitude toward Delinquency

MATSUI, Hiroshi, NAKAMURA, Shin, HORIUCHI, Katsuo and ISHII, Takayuki

要 旨

非行に対する態度を抑制する要因を明らかにすることを目的に、青少年の非行的態度の背景にある、道徳意識、価値観、恥意識、罪悪感、そして、親子関係についてその構造を検討するための調査を行った。

調査は、北海道、青森、東京、沖縄の4都道府県における10校（中学校6校、高等学校4校）で実施された。調査対象者は中学校2年生と高校2年生合計1026名である。

因子分析の結果、「恥意識」も「罪悪感」も、どちらも自分自身にかかわる気持ちと、他者を意識した気持ちという、自己-他者という意識構造を持つことがわかった。

「虞犯行為に対する罪意識」と「刑法犯行為に対する罪意識」の2因子を従属変数とし、恥意識、罪悪感、価値観、親子関係の因子を説明変数とする重回帰分析を行った。結果は他律的恥意識と他者を意識した罪悪感が非行に対する意識に対して相対的に強く影響し、価値観と親との心理的距離は相対的に弱い影響にあることが示唆された。

他方、親との心理的な距離や価値観は、非行に対する意識には直接影響する要因ではないとも考えられるため、「虞犯行為に対する罪意識」と「刑法犯行為に対する罪意識」を従属変数とした、共分散構造分析のパス解析モデルを適用した分析を行った。

この結果、他律的恥意識の非行に対する罪意識への影響が確認できた。また、価値観については、「他者志向」が2つの恥意識に対する影響が認められた。そして、「他律的恥意識」に対しては、「母親に対する親近感」が最も影響があった。

これらのことから、他者や社会に目を向けるが、恥という意識をつくり、そしてそれが非行や犯罪に対する抑止力となると思われる。そして、親の役割の大切さも示唆された。

さらに、「母親との心理的距離」の影響が中高や男女で大きく異なり、これは、恥意識の形

*教授 社会心理学

**助教授 社会心理学

***産業能率大学

****日本・精神技術研究所

成のメカニズムに関連があるのではないかという新たな課題を発見することができた。

キーワード：非行的態度，抑制要因，恥意識，罪悪感，親子関係

目 的

最近の青少年による非行は若干その様相を変えつつある。具体的には、1) 年少少年による非行の凶悪化，2) 高校生による覚醒剤などの薬物乱用の増加，3) 女子非行の増加傾向など，思わしくない現象が起きている。われわれは，このような現象の根底には日本の若者に非行にかかわるような態度の緩み，もしくは歪みがあると考えている。そして，このような態度は実際に非行的行為をする若者ではなく，ごく普通の若者の問題であり，また問題は非行に対する態度に限定されるものではなく，彼らの生き方や考え方や人間関係全般の問題であると考えている。

このような考えに基づいて，われわれは1980年代後半より，日本の中学生と高校生について調査を繰り返すとともに，アメリカ，中国，韓国，トルコなどの中学生と高校生をも対象とした調査を行っている。わが国の若者と諸外国の若者の，非行的態度，思いやり意識，道徳意識，価値観，人生観などを比較することによって，わが国の若者の特徴と問題点が明らかになると考えたからである。

たとえば，われわれの最初の国際比較研究は日本，韓国，米国，中国の中学生を対象に行なわれた。結果はどの国の中学生でも，非行に非許容的な者は愛他性が高いという一貫した傾向が認められるが，愛他性と共感性，親子関係などの間には，国によって異なる関係があった(中里・松井他1990, Nakasato & Matsui 1992)。

日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象とした調査の結果は，愛他性は国によって異なり，日本の中学・高校生は情緒的な理由で愛他行動をすることがわかった(松井1998, Nakasato & Matsui 2000)。

さらに，日本の問題として親子の心理的距離が遠いということがあり，それが非行的態度や望ましくない考え方や生き方と関係するということがわかった(松井2001, 2002, 2003, 中里・松井2003)。

そして，社会的迷惑行為と恥意識，罪悪感が関係があることがわかった(松井2004)。

われわれの最近の研究では，特に，非行的態度と恥意識や罪悪感との関係が明らかになりつ

つあり、また、その背後には親子関係の問題があることが示唆されている（堀内他 2004, 中村他 2004, 永房他 2004, 松井他 2004）。

われわれは、青少年の非行の問題の原因として、上記のような、青少年の生き方や考え方の悪化という問題があり、このような青少年の生き方や考え方の構造を理解し、非行を抑制する要因を明らかにすることが、わが国の非行の問題を解決する鍵となると考えている。

この研究の目的は、青少年の非行的態度の背景にある、道德意識、価値観、恥意識、罪悪感、そして、親子関係についてその構造を検討することである。これにより、非行に対する態度を抑制する要因を明らかにする。

方 法

1. 調査票の構成

調査票は、恥意識に関する質問（4件法、18項目）、愛他性に関する質問（4件法、5項目）、非行に対する意識に関する質問（4件法、10項目）、価値観に関する質問（4件法、12項目）、父親および母親に対する心理的な距離に関する質問（4件法、各8項目）、罪悪感に関する質問（4件法、18項目）およびフェースシートから構成された。

2. 調査期間

調査期間は、2003年9月～12月である。

表1 調査対象者

		中学2年	高校2年	合計
男子	N	224	259	483
	%	46.4	53.6	100
女子	N	222	321	543
	%	40.9	59.1	100
合計	N	446	580	1026
	%	43.5	56.5	100

3. 調査対象者

調査は、北海道、青森、東京、沖縄の4都道県における10校（中学校6校、高等学校4校）で実施された。調査対象者は表1のとおり中学校2年生と高校2年生合計1026名である。

4. 調査方法

研究計画に基づいて、質問紙による調査を行った。調査学校でクラス単位で調査票の配布、記入、回収をした。

結 果

1. 因子の検討

非行的態度にかかわる要因を確定するために因子分析を行った。方法は最小二乗法、プロマックス回転である。その結果、表2の因子を確定した。個々の質問項目と、因子分析の結果は表3以下に示す。

表2 非行的態度と関連する因子

非行許容性	刑法犯行為に対する罪意識
	虞犯行為に対する罪意識
恥意識	自律的恥意識
	他律的恥意識
罪悪感	他者を意識した罪悪感
	自分に対する罪悪感
価値観	他者志向
	享楽志向
	努力志向
	将来志向
親との関係	父への親近感
	母への親近感

非行に対する意識は、窃盗や飲酒のような行為をどのくらい「悪いか」評定させる項目である。非行に対する態度は、窃盗や傷害、薬物使用に関する項目の「刑法犯行為に対する罪意識」、

非行的態度の抑制要因に関する研究

表3 恥意識の因子分析結果

	因子	
	1	2
Q1_11 友達との約束を破ってしまったとき	.794	-.082
Q1_12 思わずウソをついてしまったとき	.696	-.004
Q1_09 自分が正しいと思ったことができなかったとき	.688	-.047
Q1_07 自分の気持ちをはっきり人に言えなかったとき	.645	.013
Q1_01 友達がいじめられているのを見て見ぬふりをしたとき	.558	.016
Q1_10 近所の人にあいさつをしなかったとき	.438	.157
Q1_02 気づかずに人に迷惑をかけてしまったとき	.363	.209
Q1_17 授業に遅れて先生にしかられたとき	-.183	.818
Q1_05 授業をサボったとき	-.068	.702
Q1_08 止めてはいけないところに自転車を駐輪したとき	.059	.655
Q1_18 バスの中でさわいで大人に注意されたとき	.068	.619
Q1_14 電車やバスの中で携帯電話をかけているとき	.081	.517
Q1_16 家で自分だけ勝手なことをしたとき	.173	.487
Q1_06 親との約束を破ってしかられたとき	.270	.429
Q1_13 してはいけない事を親に見つかったとき	.278	.374
因子寄与率	34.14	8.36

逆に言えば「重い非行の許容性」と、サボり、性関係、ポルノに関する項目の「虞犯行為に対する罪意識」、言い換えれば「軽い非行の許容性」の2因子にわけた。

親との関係は、父母それぞれに対して「尊敬している」、「父のようになりたい」などの質問をしており、親子の心理的距離を測る項目群である。親との関係に関する項目は、父親への親近感と母親への親近感に分けた。以上の、非行に対する態度と親との関係についての因子分析結果はこれまでの研究と同様2分割となるので細かい結果は省略した。中里・松井（1997, 2001, 2003）他を参照されたい。

恥意識に関する項目はたとえば「授業をサボる」というような行為をどのくらい、「恥ずかしいか」評定させるものである。因子分析の結果、この因子に含まれる項目から「自律的恥意識」、つまり自分の行為を自ら省みたときに恥ずかしいという気持ちと、「他律的恥意識」、つまり他者を意識したときに恥ずかしいという気持ちに分かれる。

罪悪感に関する項目はたとえば「授業をサボる」というような行為をどのくらい、「悪いか」評定させるものである。罪悪感も恥と同様に、因子に含まれる項目から「他者を意識した罪悪感」と、「自分を省みたときの罪悪感」に分かれる。

罪悪感も同様に、因子に含まれる項目から「他者を意識した罪悪感」と、「自分を省みたと

表4 価値観の因子分析結果

	因子			
	1	2	3	4
Q4_08 人生は自分のことだけでなく人のことを考えることが大切だ	.601	.101	.067	-.109
Q4_02 皆が幸福にならなければ個人の幸福はない	.515	.089	-.021	.009
Q4_04 人生はお金だけでは幸福になれない	.462	-.264	-.038	.089
Q4_06 人生にはお金がなにより大切だ	-.147	.717	.049	-.092
Q4_09 何よりも自分の生活を充実させることが大切だ	-.036	.373	.106	.301
Q4_03 人生は運に左右されることが多い	.230	.334	-.060	-.016
Q4_07 今よりも将来のために努力する	.031	.037	.676	.054
Q4_05 今が楽しければよい	.062	.388	-.388	.143
Q4_10 成功はその人の努力しただ	.207	.004	.225	.182
Q4_11 自分の将来は明るいと思う	-.067	-.066	.028	.476
Q4_01 人になんと思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ	.104	.091	.006	.463
Q4_12 進学や就職のことが不安だ	.221	.232	.065	-.249
因子寄与率	11.30	9.57	4.48	3.67

表5 罪悪感の因子分析結果

	成分	
	1	2
Q9_09 授業をサボること	.877	
Q9_04 授業に遅れること	.853	
Q9_15 止めてはいけないところに自転車を駐輪すること	.715	
Q9_10 してはいけない事をする事	.640	
Q9_16 電車やバスの中で携帯電話をかけること	.611	
Q9_07 バスの中でさわぐこと	.609	
Q9_03 家で自分だけ勝手なことをすること	.455	
Q9_13 自分の気持ちをはっきり人に言えないこと		.874
Q9_12 友達との約束を破ること		.691
Q9_18 思わずウソをついてしまうこと		.659
Q9_08 自分が正しいと思ったことができないこと		.630
Q9_11 近所の人にあいさつをしないこと		.548
Q9_17 友達がいじめられているのを見て見ぬふりをする事		.535
Q9_01 気づかずに人に迷惑をかけてしまうこと		.473
Q9_14 親との約束を破ること	.379	.422
因子寄与率	37.43	9.45

きの罪悪感」に分かれる。

価値観は以下のように、因子分析の結果から、「他者志向」、「享楽志向」、「努力志向」、「将来志向」の4種の価値観に分かれた。

2. 非行許容性に対する諸要因の影響の重回帰分析結果

非行に対する意識に対しての恥意識や親子の関係などの諸要因の影響を確認するために、重回帰分析を行った。従属変数は、酒を飲む、夜遅くまで外で遊ぶなど6項目から構成される「虞犯行為に対する罪意識の高さ」、つまり「軽い非行に対する許容性」と、人の物を盗む、覚醒剤などの薬物を使うなど4項目から構成される「刑法犯行為に対する罪意識」つまり「重い非行に対する許容性」の2変数である。

この2変数は、合計10項目からなる非行に対する態度の因子分析により抽出されたものであり、また分布が大きく異なる。「虞犯行為に対する罪意識」は平均1.80, SD0.72と「たいしたことはない」という方向に分布が偏り、「刑法犯行為に対する罪意識」では平均3.22, SD0.65と「非常に悪いことだと思う」という方向に分布が偏っている。また、両者の相関係数は0.44と中程度の値を示した。

独立変数は、恥意識に関する2変数、価値観に関する4変数、親に対する心理的距離2変数、罪悪感に関する2変数の10変数であり、この10変数の全てを強制投入した。

2-1. 「虞犯行為に対する罪意識の高さ」を従属変数とした重回帰分析

「虞犯行為に対する罪意識」を従属変数とした重回帰分析の結果は、表6のとおりである。

この重回帰分析における重相関係数は0.565と比較的良好な値を示した。

標準偏回帰係数の大きさから、この10変数においては、「虞犯行為に対する罪意識」に対する影響の大きさでは、「他律的恥意識」が最も大きく、ついで「他者を意識した罪悪感」であった。また、「自律的恥意識」「享楽志向」「母への親近感」の3変数はマイナスの影響が認められた。

2-2. 「刑法犯行為に対する罪意識の高さ」を従属変数とした重回帰分析

「刑法犯行為に対する罪意識」を従属変数とした重回帰分析の結果は、表7のとおりである。

この重回帰分析における重相関係数は0.454であり、「虞犯行為に対する罪意識」より若干低めの数値となった。

標準偏回帰係数の大きさから、この10変数においては、「刑法犯行為に対する罪意識」に対する影響の大きさでは、「他者を意識した罪悪感」が最も大きく、ついで「他律的恥意識」で

表6 「虞犯行為に対する罪意識」を従属変数とした重回帰分析の結果

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	.224	.192		1.166	.244
	Q1 F1 自律的恥意識	-.249	.054	-.196	-4.639	.000
	Q1 F2 他律的恥意識	.479	.053	.394	9.013	.000
	Q4 F1 他者志向	.051	.031	.049	1.632	.103
	Q4 F2 享楽志向	-.062	.030	-.057	-2.038	.042
	Q4 F3 努力志向	.124	.034	.105	3.615	.000
	Q4 F4 将来志向	-.001	.033	-.001	-.036	.972
	Q6 F1 父への親近感	.041	.034	.040	1.213	.225
	Q8 F1 母への親近感	-.122	.036	-.115	-3.379	.001
	Q9 F1 他者を意識した罪悪感	.380	.057	.299	6.696	.000
	Q9 F2 自分に対する罪悪感	-.038	.059	-.028	-.643	.520

あった。この2変数は「虞犯行為に対する罪意識」でも相対的に高い影響が認められた。ただし、「虞犯行為に対する罪意識」の分析結果と比較すると、相対的に標準偏回帰係数の値は低くなった。その他に「享楽志向」と「努力志向」の2変数が有意であった。

表7 「刑法犯行為に対する罪意識」を従属変数とした重回帰分析の結果

モデル		非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
		B	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	1.577	.188		8.375	.000
	Q1 F1 自律的恥意識	-.013	.053	-.011	-.245	.807
	Q1 F2 他律的恥意識	.187	.052	.170	3.590	.000
	Q4 F1 他者志向	.055	.031	.058	1.785	.075
	Q4 F2 享楽志向	-.060	.030	-.061	-2.004	.045
	Q4 F3 努力志向	.071	.034	.067	2.116	.035
	Q4 F4 将来志向	-.020	.032	-.019	-.618	.537
	Q6 F1 父への親近感	.018	.033	.019	.535	.593
	Q8 F1 母への親近感	.067	.035	.069	1.889	.059
	Q9 F1 他者を意識した罪悪感	.223	.056	.193	3.991	.000
	Q9 F2 自分に対する罪悪感	.062	.058	.050	1.064	.288

2-3. 重回帰分析まとめ

上記2つの分析から、他律的恥意識と他者を意識した罪悪感が、非行への意識に対して相対的に強く影響し、価値観と親との心理的距離は相対的に弱い影響にあることが推察される。他方、たしかに、非行の意識に対して恥意識や罪悪感は直接的に関連することが予想される概念である。それに対して、親との心理的な距離や価値観は、恥意識や罪悪感の形成にも必要なより深い次元での概念と考えられるのではなからうか。操作的に言えば、独立変数とした10変数の中にも階層性があると考えられるであろう。この確認のため、次にパス解析を試みる。

3. 非行に対する態度に対する諸要因の影響のパス解析結果

ここでは共分散構造分析のパス解析モデルを適用した。共分散構造分析では複数のモデルを比較検討するという探索的な方法がよく用いられているようである。本研究でも非行に対する意識を説明するモデルを複数作成し、検討した。

3-1. 「虞犯行為に対する罪意識の高さ」に関するモデルの検討

「虞犯行為に対する罪意識」に関するモデルの検討では、図1のモデル適合度（GFIおよびAGFI）が最も高かった。図中の直線の矢印で表されているのは標準化されたパス係数である。また、曲線の両矢印で表されているのは相関係数である。共分散構造分析のため、欠損値のあるデータを除外したため、表7の値とは若干ではあるが異なっている。

このモデルでは、「虞犯行為に対する罪意識」、つまり「軽い非行の許容性」に対して「他律的恥意識」の影響が.583と最も高く、他者の目を意識した場合の恥ずかしさを強く感じる人は、虞犯行為に関して悪いことだと強く感じるようである。「自律的恥意識」は、-.172と低い数値ながら負の値を示した。自分の基準で恥ずかしいと強く感じる人は、虞犯行為について、むしろ、やや許容的であるようだ。この点についてはパス係数の値が低いこともあり、あまり過度な解釈をするのは危険である。今後の研究課題としたい。

次に、「他律的恥意識」に対しては、「母親に対する親近感」が.217と最も影響があり、恥や非行行為に対する意識の形成に母親との関係が大変重要であることが示唆される。

また、価値観では、「他者志向」が「自律的恥意識」に.256、「他律的恥意識」に.153と他の価値観の変数と比較すると高い値を示し、他者や社会に関心を向けていることが恥意識に影響しているという結果であった。経験的にもこの両者に関係があることは十分に納得のいくことであり、特に「自律的恥意識」へより強く影響している点は大変興味深い。他者や社会に目を向けるからこそ自分にとって何が恥ずかしいのかをより強く意識するのではないかと思われるが、今後さらに検討が必要である。

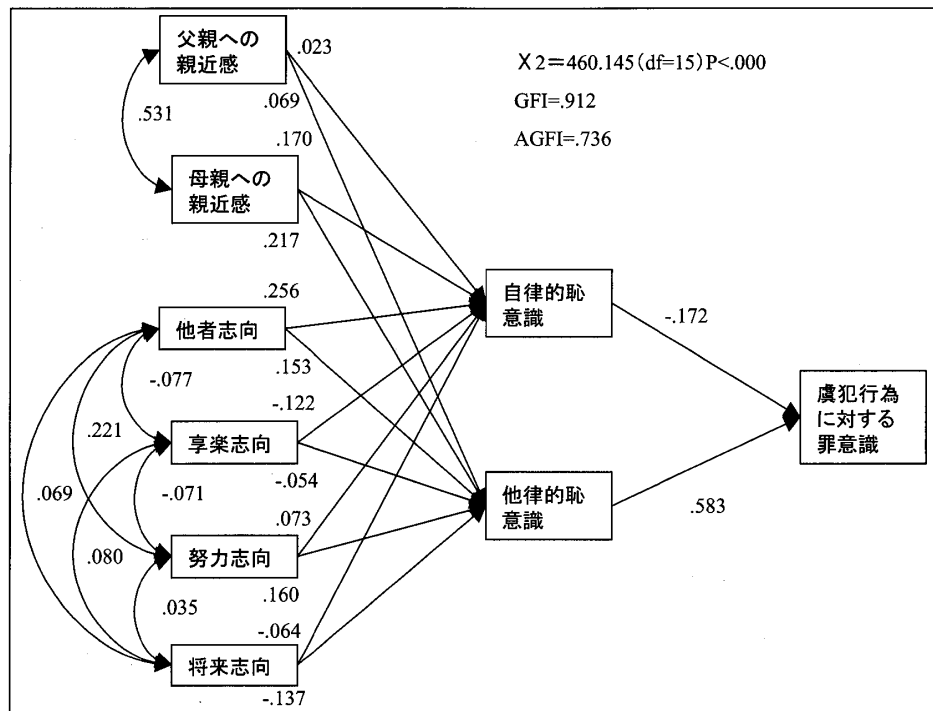


図1 「虞犯行為に対する罪意識」に関するモデル

3-2. 「刑法犯行為に対する罪意識」に関するモデルの検討

「刑法犯行為に対する罪意識」つまり「重い非行の許容性」に関するモデルの検討では、図2のモデル適合度（GFIおよびAGFI）が最も高かった。このモデルは、図1と同じモデルであり、最終の従属変数が異なるだけである。したがって、「自律的恥意識」および「他律的恥意識」から「刑法犯行為に対する罪意識」に出るパス係数と、モデルの適合度指標の値のみが図1とは異なる。

「刑法犯行為に対する罪意識」は、「虞犯行為」のモデルと比較すると若干数値は落ちているものの、やはり「他律的恥意識」に最も大きな影響を受けている。また、「自律的恥意識」の数値は低いものの「虞犯行為」のモデルとは違い正の値を示した。

ちなみに、図1と図2を統合したモデル（図3）では、適合度指標の値が若干落ちる（GFI = .893, AGFI = .732）という結果であった。モデル全体としてはやはり個別に検討すべきだと思われる。しかし、男女別および中高校生別の比較では、2つの非行に対する罪意識を同時に検討できる利便性をとり、このモデルで検討した。

非行的態度の抑制要因に関する研究

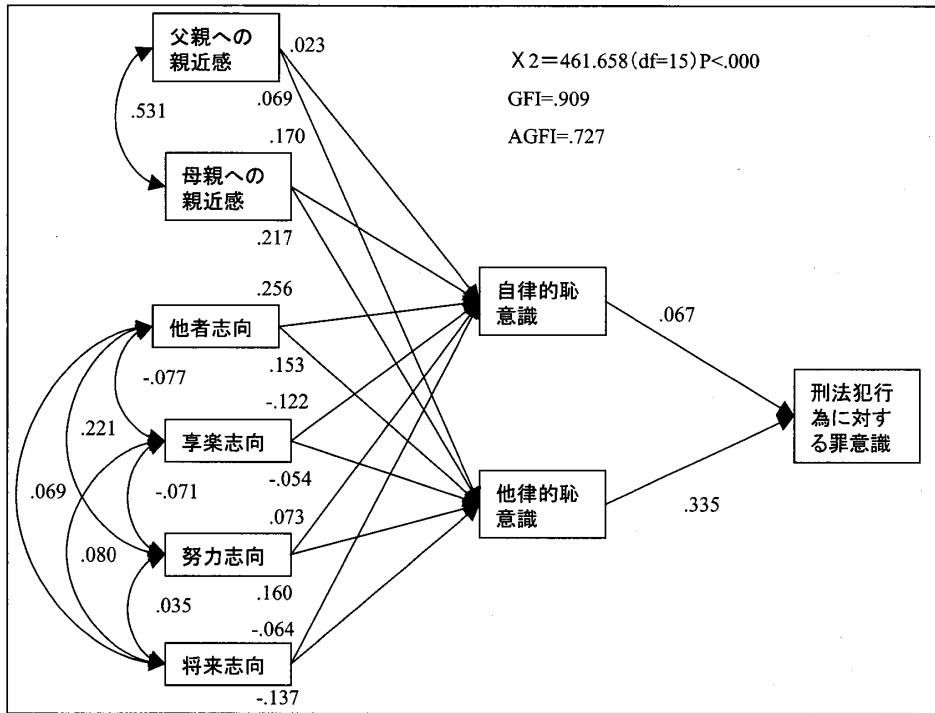


図2 「刑法犯行為に対する罪意識」に関するモデル

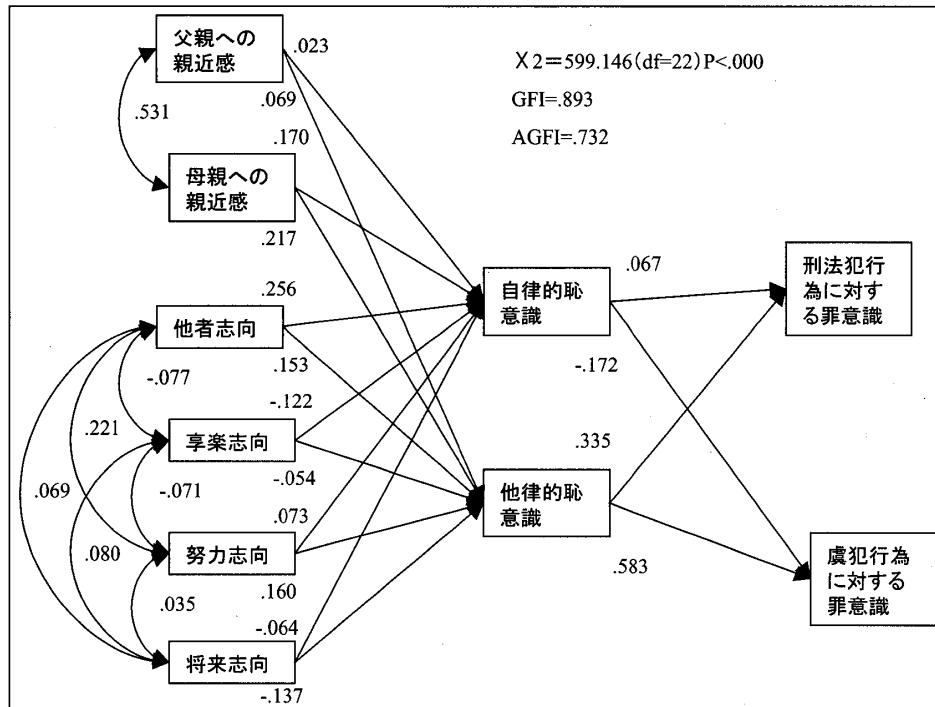


図3 「虞犯行為」および「刑法犯行為に対する罪意識」に関するモデル

3-3. 男女別の結果

男女別の結果を検討すると、男子のモデル（図4）では $GFI = .885$, $AGFI = .714$, 女子のモデル（図5）では $GFI = .898$, $AGFI = .745$ であり、両者とも適合度としては若干低い値であるが、両者に大きな差はない。

恥意識と罪意識の影響関係を見ると、やや男女で差のある箇所が見受けられる。「他律的恥意識」が、刑法犯行為と虞犯行為2つの罪意識に及ぼす影響は、男子が.359と.612, 女子が.308と.557であり、女子と比較すると男子の方が影響が大きい傾向にある。また、「自律的恥意識」が「虞犯行為」に及ぼす影響も、男子が-.241, 女子が-.102と男子の方が高い傾向にある。

また、親子関係が恥意識に及ぼす影響についても男女で差が見受けられる。

男子では、「母親への親近感」が恥意識に及ぼす影響は、.227と.253であるのに対して、「父親への親近感」は、-.016と.015であり、母親の影響の方が父親より圧倒的に大きい。女子では、「母親への親近感」が恥意識に及ぼす影響は、.060と.158であるのに対して、「父親への親近感」は、.082と.128であり、父親と母親の差がほとんどない。

つまり、男子は母親との心理的距離の影響が2つの恥意識に対して強く、女子は男子と比較すると親との心理的距離の影響がやや小さいが、両親ともに同じくらいの影響が「他律的恥意識」において見受けられる。

3-4. 中学・高校別の結果

中学・高校別の結果を検討すると、中学生のモデル（図6）では $GFI = .859$, $AGFI = .646$ であった。適合度指標としては低めの値であり、中学生のデータではモデルの再検討を要するであろう。今回は中学生と高校生の比較を焦点としているので、同じモデルを適応し検討を進める。高校生のモデル（図7）では $GFI = .904$, $AGFI = .759$ であった。

非行に対する意識を構成する刑法犯行為と虞犯行為の2つの罪意識、逆に言えば許容性に対する、2つの恥意識の関係を中学・高校で比較すると、「自律的恥意識」から「刑法犯行為」へのパス係数は、中学で.065, 高校で.042, 「自律的恥意識」から「虞犯行為」へのパス係数は、中学で-.124, 高校で-.100, 「他律的恥意識」から「刑法犯行為」へのパス係数は、中学で.383, 高校で.276, 「他律的恥意識」から「虞犯行為」へのパス係数は、中学で.617, 高校で.482であり、全般的に恥意識が犯罪に対する罪意識に与える影響は、中学の方が影響度が大きい結果となった。

親との心理的距離と恥意識の関係では、中学・高校ともに母親の影響が父親よりも強い。ただし、中学におけるパス係数の値よりも、高校の値の方が、母親で若干低くなり、父親で若干

非行的態度の抑制要因に関する研究

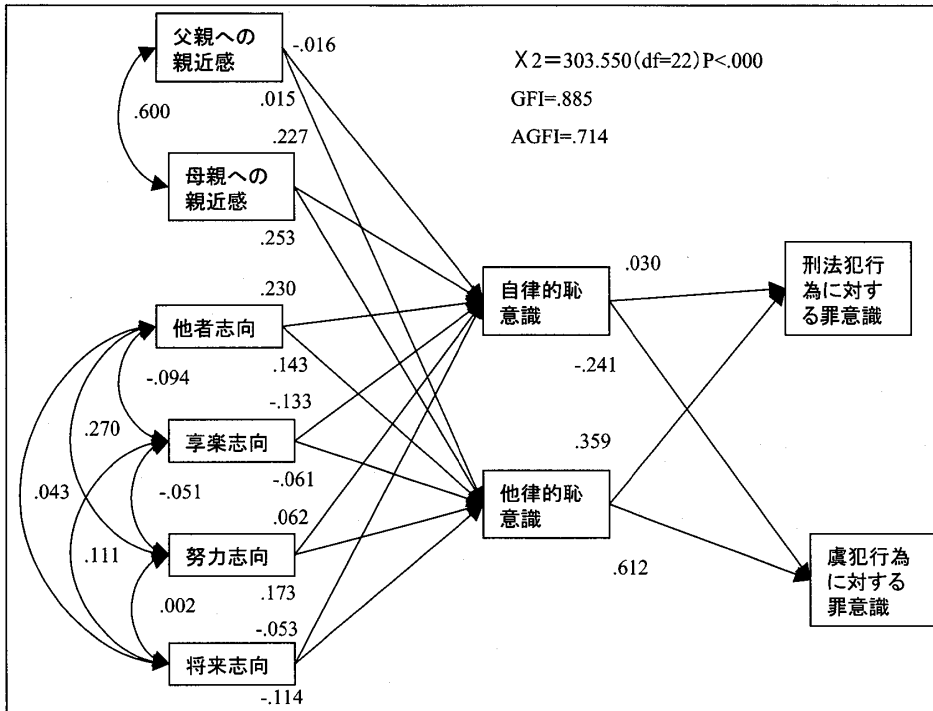


図4 男子の結果

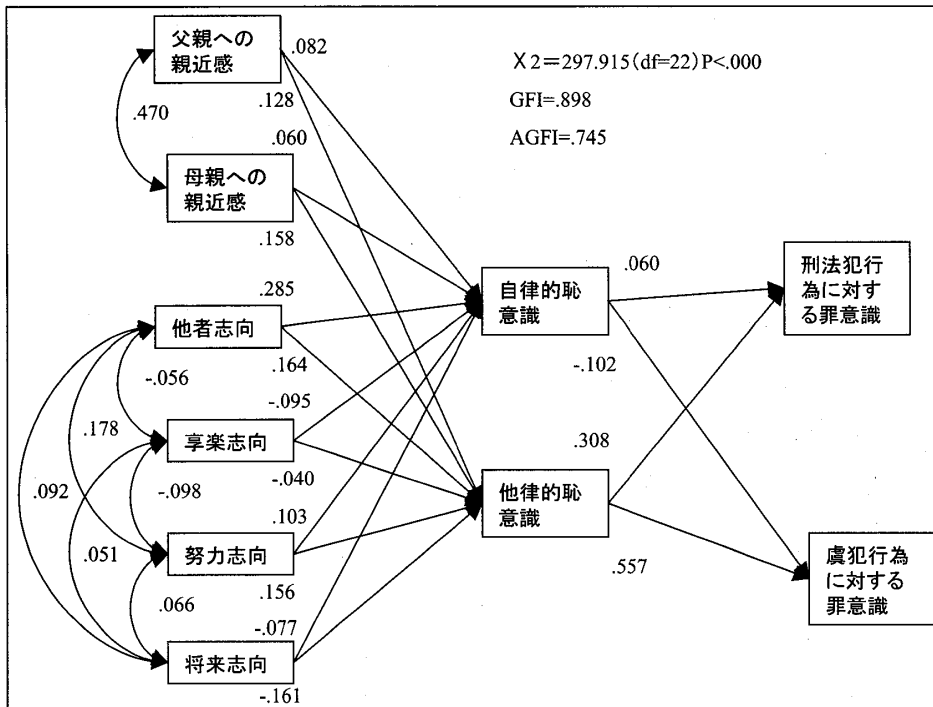


図5 女子の結果

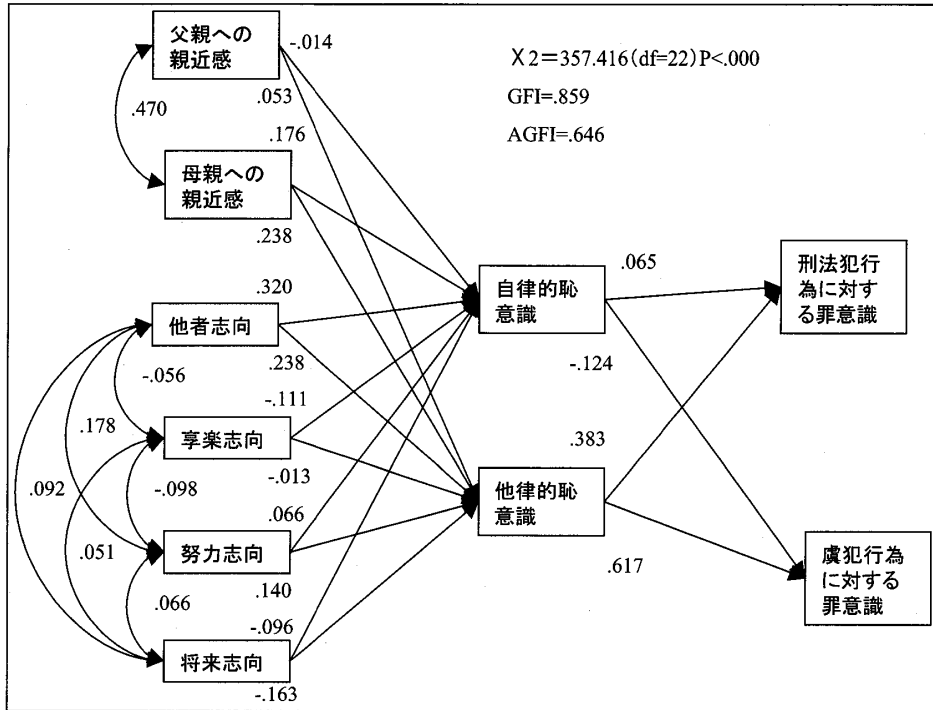


図6 中学生の結果

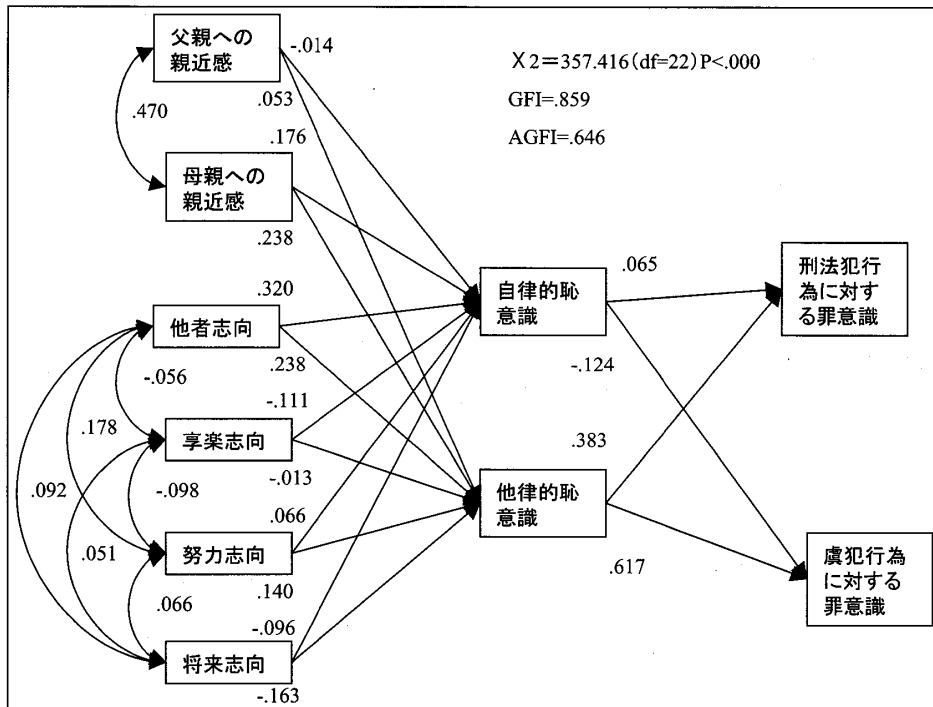


図7 高校生の結果

上がるために、高校では父親と母親の差が中学よりも小さくなる傾向がある。

価値観では、中学・高校ともに他の変数よりも「他者志向」が「自律的恥意識」に及ぼす影響が大きかった。しかし、両者間では、「他者志向」から「他律的恥意識」へのパス係数が、中学では.238、高校では.085と大きな違いがあった。

「他者志向」の恥意識に及ぼす影響は、価値観の他の3つ変数と比較して、どの分析でも高い傾向があった。

3-5. パス解析結果のまとめ

共分散構造分析のパス解析モデルを適用した分析を行った。これは、非行に対する罪意識に対して、親との関係や価値観といった構成概念が直接的に影響するという解析モデルに限界を感じたためである。親との関係や価値観が、何らかの行動を恥ずかしいと思う意識に影響を与え、結果として、非行に対する許容的な態度が抑制されるであろうと我々は考えた。このアイデアにもとづいて複数のモデルを作成し検討した。検討の途中で罪悪感についてはその測定内容と、パス係数およびモデルの適合指標との関連で分析から除外した。

この結果、重回帰分析でも恥意識の非行に対する罪意識への影響は認められていたが、共分散構造分析でも影響が確認できた。また、価値観については、「他者志向」が2つの恥意識に対する影響が認められ、重回帰分析とは違った知見を得ることができた。

さらに、男女別および中学・高校別の分析を通じて、女子より男子の方が影響が大きく、高校よりも中学で影響が大きいというように、「母親との心理的距離」の影響が中高や男女で大きく異なり、これは、恥意識の形成のメカニズムに関連があるのではないかという新たな課題を発見することができた。

考 察

因子分析の結果、恥意識と罪悪感は、それぞれ「自律的恥意識」、つまり自分の行為を自ら省みたときに恥ずかしいという気持ちと、「他律的恥意識」、つまり他者を意識したときに恥ずかしいという気持ちに分かれ、また、「他者を意識した罪悪感」と、「自分を省みたときの罪悪感」に分かれた。つまり、「恥」も「罪」も、どちらも自分自身にかかわる気持ちと、他者を意識した気持ちという、自己—他者という意識構造を持つことがわかった。このことは、下記のように非行抑制要因として、恥意識や罪悪感を考える場合、それが自己に関わることか、他者に関わることか区別すべきだということを示唆している。

酒を飲む、夜遅くまで外で遊ぶなど6項目から構成される「虞犯行為に対する罪意識」、つ

まり「軽い非行に対する許容性」と、人の物を盗む、覚醒剤などの薬物を使うなど4項目から構成される「刑法犯行為に対する罪意識」、つまり「重い非行に対する許容性」の2因子を従属変数とし、恥意識、罪悪感、価値観、親子関係の因子を説明変数とする重回帰分析を行った。結果は他律的恥意識と他者を意識した罪悪感が非行に対する意識に対して相対的に強く影響し、価値観と親との心理的距離は相対的に弱い影響にあることが示唆された。つまり、非行に対する意識は、他者とのかわりにおける恥意識や罪悪感が強いかわりか弱いかわりによって影響されるということである。

他方、非行に対する意識に対して、恥意識や罪悪感は直接的に関連することが予想される概念であるが、親との心理的距離や価値観は、恥意識や罪悪感の形成に必要な要因ではあるが、非行に対する意識には直接影響する要因ではないのかもしれない。この確認のため、「虞犯行為に対する罪意識」と「刑法犯行為に対する罪意識」を従属変数とした、共分散構造分析のパス解析モデルを適用した分析を行った。これは、非行に対する意識に対して、親との関係や価値観といった構成概念が直接的に影響するという、前述の解析モデルに限界を感じたためである。親との関係や価値観が、何らかの行動を恥ずかしいと思う意識に影響を与え、そして結果として、そのような恥意識などによって、非行に対する許容的な態度が抑制されるであろうと我々は考えたのである。

このアイデアにもとづいて複数のモデルを作成し検討した。検討の途中で罪悪感についてはその測定内容と、パス係数およびモデルの適合指標との関連で分析から除外した。

この結果、重回帰分析でも、他律的恥意識の非行に対する罪意識への影響は認められていたが、共分散構造分析でも影響が確認できた。また、価値観については、「他者志向」が2つの恥意識に対する影響が認められ、重回帰分析とは違った知見を得ることができた。

これらのことから、他者や社会に目を向けるからこそ自分にとって何が恥ずかしいのかをより強く意識し、そしてそれが非行や犯罪に対する抑止力となると思われる。しかし、この結論については、今後さらに検討が必要である。

そして、「他律的恥意識」に対しては、「母親に対する親近感」が最も影響があり、恥や非行行為に対する意識の形成に、母親との関係が大変重要であることが示唆される。

さらに、男女別および中学・高校別の分析を通じて、女子より男子の方が影響が大きく、高校よりも中学で影響が大きいというように、「母親との心理的距離」の影響が中高や男女で大きく異なり、これは、恥意識の形成のメカニズムに関連があるのではないかと新しい課題を発見することができた。

文 献

- 松井 洋, 1991, 「青年期における愛他行動の発達とその規定因」, 『川村学園女子大学研究紀要』第2巻 pp.181-193.
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之, 1995, 「愛他性の構造に関する国際比較研究」, 『日本心理学会第59回大会発表論文集』, p.173.
- 松井 洋, 1997, 「愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第8巻, 第1号, pp.147-165.
- 松井 洋, 1998, 「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第8巻, 第1号, pp.147-165.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 1998, 「愛他性の構造に関する国際比較研究」, 『社会心理学研究』, 第13巻, 2号, pp.133-142.
- 松井 洋, 1998, 「中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—」, Health Sciences, vol.14, no.2, pp.45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋, 1998, 「愛他性に関する国際比較研究—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第9巻, 第1号, pp.175-186.
- 松井 洋, 1999, 「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第10巻, 第1号, pp.131-153.
- 松井 洋, 2000, 「日本の若者のどこがへんなのか—中学生・高校生の国際比較から—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第11巻, 第1号, pp.101-114.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之, 2000, 「中学生の親子の心理的距離」, 『日本心理学会第64回大会論文集』, p.190.
- 松井 洋, 2001, 「日本の中学生の親子関係」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第12巻, 第1号, pp.101-114.
- 松井 洋, 2002, 「日本の中学生の親子関係と非行的態度」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第13巻, 第1号, pp.105-119.
- 松井 洋, 2003, 「親子関係と子どもの道徳性—日本, アメリカ, トルコの中高生の比較—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第14巻, 第1号, pp.85-99.
- 松井 洋, 2004, 「社会的迷惑行為に関する研究」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第15巻, 第1号, pp.55-68.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究 (4)—社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感—」, 『日本社会心理学会第45回大会発表論文集』, p.522.
- 松井 洋, 2004, 「少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性」, 『児童心理』, vol.58, no.2, pp.16-21, 金子書房.
- 堀内勝夫・中里至正・松井 洋・中村 真・永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究 (1)—価値観との関係—」, 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, p.526.
- 永房典之・中里至正・松井 洋・中村 真・堀内勝夫, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究 (2)—非行的態度との関係—」, 『日本社会心理学会第45回大会発表論文集』, p.524.

- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之, 2004, 「恥意識の行動抑制効果に関する研究 (3) — 親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響 —」, 『日本社会心理学会第45回大会発表論文集』, p.520.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久, 1992, 「非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として」, (財)日工組調査研究財団.
- Nakasato, Y. & Matstui, H. 1993, "Altruistic Attitudes of Japanese Youths", *International Journal of Psychology*, vol.27, p.562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H. 1996, "A Structure of Altruistic Attitudes—A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths—", *International Journal of Psychology*, vol.28, p.48.
- 中里至正・松井 洋 (編著), 1997, 『異質な日本の若者たち』, プレーン出版.
- 中里至正・松井 洋, 1999, 『日本の若者の弱点』, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋, 2003, 『日本の親の弱点』, 毎日新聞社.

- 1) 本研究は (財)社会安全研究財団より研究助成を受けた (代表 松井洋)。本論文はこの財団への研究報告書を基にまとめたものである。
- 2) 本論文は, 本論文の著者の他に, 東洋大学中里至正, 永房典之との共同研究の成果である。